



NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

季刊

vol.

207

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成25(2013)年10月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙パルプ配合再生紙使用



津具の花祭 古櫛(設楽町)



布川の花祭 櫛鬼(東栄町)

奥三河のくらしと 特別展 花祭・田楽

平成25年11月2日(土)～12月15日(日)

愛知県の新城設楽地区を奥三河と言い、鬼の舞で知られる花祭や、豊作を願って行われた田楽など、日本を代表する民俗芸能がいくつもあります。名古屋市博物館では、これまでも、愛知県内に所在する国指定の民俗文化財を順次紹介してきました。今回は、「花祭」、「三河の田楽」(いずれも重要無形民俗文化財)、「津具の山樵用具および加工品」(重要有形民俗文化財)を紹介します。

本展では、奥三河のくらしの民具、花祭や田楽の

紹介を通して、山村の民俗文化と森林の大切さを見つめます。山村は、木材や食糧、燃料などの供給、水源の保護、土砂災害の防止、さらには、生物多様性や地球環境の保全の上でも大切な役割を果たしてきました。

本展を見て、花祭や田楽の見学、山村の大切さに触れるため、奥三河を訪ねてみませんか。

なお、本展は名古屋市と愛知県の連携事業のひとつとして開催します。

発見☆高句麗太王陵のレンガ

高句麗の広開土王（好太王）という人物をご存知でしょうか。そういえば中学・高校の社会科で「高句麗広開土王（好太王）碑」というのを習った、と思ひ出される方はきっと少なくないでしょう。

広開土王碑に刻まれた事柄のうち、「辛卯年（西暦391年）から、倭（日本）が海を渡り朝鮮半島の百済や新羅を従えて、たびたび攻め込んできた。広開土王は高句麗軍を率い、それらの倭軍を大いに撃退した。」という記事は有名で、当時の東アジア情勢を表す内容として重要視されています。

その広開土王は、第19代の高句麗王で、中国の史書によれば彼の姓名は「高安」だったようです。高句麗は、現在の中国吉林省から朝鮮民主主義人民共和国にかけてを支配し、朝鮮半島南部の百済・新羅、そして倭との間で、抗争を繰り返しました。広開土王は4世紀後半～5世紀初めに活躍し、勢力の衰えていた高句麗を強大な国家に建て直した名君でした。西暦374年に生まれ、没年は412年または413年とされていますから、今がちょうど広開土王没後1600年ということになります。

さて、名古屋市博物館の収蔵資料のなかに、高句麗太王陵の「磚」があります。「磚」とは、粘土を型にはめて形を整え、焼いて作ったレンガのことです。

この磚は、法隆寺の昭和の大修理を担当した建築

史学者・浅野清氏（元・愛知工業大学教授）の旧蔵資料を、1994年に名古屋市内在住の若林伸也氏から一括で受贈した際、そのなかにたった1点含まれていたものです。これまでは中国か朝鮮半島の遺跡のものだろうと推測されてきました。

今年3月、この磚の銘文が気になって調べ始めたところ、「太」の字体に見覚えがあったため、拓本をとって銘文を解説し、それが太王陵の出土品であるとわかったのです。

この磚の出土地である太王陵は、中国吉林省集安市に所在します。高句麗広開土王の陵墓と考えられており、広開土王碑もその北東約360mの場所に位置しています。太王陵の周囲には、レンガ積み垣根があり、本来この磚はその垣根を築くのに使用されたものでした。

この磚の大きさは、縦の残存長16.4cm・横16.4cm・厚さ2.3cmです。太王陵で出土した同種の磚の完形品は縦約30cmですから、半分ほどが残存しています。側面に「願太王陵安」という銘文が型押しされています。本来の完全な銘文は「願太王陵安如山固如岳」で、「太王陵が山や丘のように、安らかで堅固でありますように」という意味になっています。先王の墓がいつまでも傷むことなく安泰であれ、と祈念するのは、ずっと自分たちを見守ってほしいという人々の尊崇と守護の願いでもあったでしょう。

ところで、日本国内では、高句麗に関する出土資料を所蔵する機関はあまり多くありません。なかでも集安の出土資料はとくに少なく、その所蔵機関は非常に限られています。太王陵の出土資料を所蔵する機関は、日本国内では6ヶ所程度の大学・博物館・研究施設のみで、それらはいずれも学史上に重要な意義のある資料として所蔵されています。

ですから、地方の公立博物館である名古屋市博物館に、わずか1点とはいえ太王陵出土の磚が収蔵されているのは、たいへん貴重です。しかも、その旧蔵者は浅野清氏という、法隆寺建築の第一人者として国内外に著名な、名古屋にゆかりの大学者でした。

教科書でみた、あの「高句麗広開土王碑」ですが、その遺跡・その人物・その歴史が、突然、名古屋に身近なものになったような気がしませんか？ 名古屋にとってきわめて大切な価値のある文化遺産が、またひとつ増えたといえるでしょう。

（藤井康隆）



高句麗太王陵 銘文磚（左）と銘文の拓本（右）

常設展フリールーム・テーマ10

平成25年10月23日(水)～11月24日(日)

桜誓願寺の天井板絵

平成22年(2010)、当館は天井板絵147枚を新しく収蔵しました。これらは昭和区滝川町にある誓願寺(通称:桜誓願寺)の裏堂の天井を彩っていたもので、改築にあたって取り外した際、誓願寺より寄贈されました。

この天井板絵は、およそ50センチ四方の板で、その片面に花鳥や人物などが墨や岩絵の具で描かれています。残念ながら、いつ、誰がどのように制作したものなのか、という記録は残っていません。ただ板絵のうち半分ほどの作品には名前が入っており、作者を探す手がかりとなっています。

これまでに判明した限りでは、四条派の服部雲仙(1831-95)や佐々木月岱(?-1870)、南画の上田桃逸(?-1869)など幕末の名古屋で活躍した画家のほか、尾張藩の医師である藤浪方岳(1798-1867)の名前もみられます。このように少しずつ明らかになってきていますが、来歴が全く分からない人も多く、その探索はまだまだ続行中です。

さて、この板絵の裏面には長年の埃が堆積していました。大部分は裏堂の解体時に払われていましたが、なんととっても歴史ある埃ですから、しぶとく残っていました。そのため良く晴れた日にこの板絵を清掃してみたところ、ある驚くべき情報が現れたのです。



図 風花翁雲阿「牡丹に蝶図」館蔵

裏面には、それぞれ漢数字が墨で記されていました。それらは天井に設置する際の目安として書かれ

たものでしょうが、なかには年号や作者、奉納者を示す墨書が記されているものもあったのです。特に、作者の名前が記されていない「牡丹に蝶図」(挿図)の裏面には大変重要な墨書が隠されていました。

是／御宮御別当／尊寿院権僧正／雲阿大和尚筆也
／文学士吾先子小翁居士に受／けたりし因縁なり／
戊午孟夏 秦寿太郎／世寿

つまりこの墨書からは、「牡丹に蝶図」が、名古屋の東照宮別当尊寿院十六世(十一世とも)をつとめ、書画および詩作に秀でた風流人である風花翁雲阿(1806-80)の筆になること、そして「秦寿太郎」「世寿」なる人物が先子「小翁」の縁にて雲阿に依頼し描いてもらったこと、安政5年(1858)5月にこの墨書を書き付けたことが判明します(作画自体も同時期と思われます)。

この「秦寿太郎」なる名前は、ほかの板絵裏面にも見られ、天井板絵全体を奉納するにあたり、世話人をつとめた人物だと考えられます。

実は、彼は尾張を代表する儒学者であり、文化人サークルの顔役であった秦鼎の息子であり、自身も尾張藩士で明倫堂教授をつとめた儒学者秦世寿なのです!「寿太郎」は彼の通称であり、墨書中の「小翁」は父親である鼎の別号です。また、ほかの板絵裏面のなかには「ヨゝホギ」と記されたものもありました。

表面に記されたほかの年記と合わせて考えると、この天井板絵147枚は一気に制作されたものではなく、少なくとも嘉永6年(1853)から安政5年(1858)という6年もの月日をかけて、序々に揃ったものであることが分かります。また、医師である藤浪方岳の絵が含まれていることを考えると画で名を馳せた人物にとどまらず、より幅広い意味での文化人に依頼している様子が見えてきます。おそらく世話人の秦世寿が随時、知り合いの文化人に依頼して描いてもらったものなのでしょう。

秦世寿は安政6年(1859)6月22日に64歳で亡くなりました(南寺町時代の誓願寺に葬られています)が、以上のことを考えあわせると、この天井板絵制作は、彼の晩年を彩る大きなプロジェクトだったのではないのでしょうか。

11月のフリールームとテーマ10では誓願寺の天井板絵の中から、特徴的な20点あまりを紹介いたします。この天井板絵を通して、秦世寿から広がる幕末期の尾張文化人のネットワークをご覧いただきたいと思います。(津田 卓子)



布川の花祭（東栄町）



田峯田楽（設楽町）



津具の花祭（設楽町）

奥三河のくらしと 花祭・田楽

特別展

平成25年11月2日(土)～12月15日(日)

休館日 11月5・11・18・25・26日
12月2・9日

開館時間 午前9時30分～午後5時
(入場は午後4時30分まで)

観覧料金 一 般 600円 (500円)
高大生 400円 (300円)
() 内は20名以上の団体
小中生無料

主 催 名古屋市博物館 愛知県教育委員会
協 力 花祭の未来を考える実行委員会
名古屋大学大学院文学研究科
教育産業株式会社 人形劇団むすび座
日本キャタピラー

後 援 設楽町教育委員会 東栄町教育委員会
豊根村教育委員会 新城市教育委員会

本展の構成

山仕事をぎゅっと凝縮

本展では、まず、奥三河の山仕事をぎゅっと凝縮したかのような「津具^{つぐ}の山樵用具^{さんしょう}および加工品」(重要有形民俗文化財)と、米の収量は少なくとも生活に必要なワラを得るためでもあった稲作の道具など、さまざまな民具を紹介します。山村は、木材や食料、燃料の供給地であるばかりではなく、水源や生物多様性や地球環境の保全になくてはならないものです。民具を通して山村の大切さを見つめ直します。

また、正月と旧正月の行事や、しかうち神事など、花祭や田楽とともに行われてきた年中行事を紹介します。霜月神楽としての花祭と予祝行事としての田楽を、正月をはさんで行われた行事として、その意味を考えてみます。

田楽は田遊び

田楽は、田植えを前にして、神を迎え、豊作を願って行われた行事が、田を離れて行われるようになった民俗芸能です。愛知県では、鳳来寺田楽、黒沢田楽、田峯田楽が「三河の田楽」(重要無形民俗文化財)として知られています。本展では、設楽町田峯の田楽を紹介します。設楽町の田峯田楽は、神を祀る行事と舞が行われる昼田楽(伽藍祭^{がらんまつり})、豊作を祈願し鉦^{せき}つくりや堰^{せき}さらいなどの田遊びが行われる夜田楽、面をつけた田楽舞が中心の朝田楽の三つの部分で構成されています。

● 花祭は神事

「花祭」(重要無形民俗文化財)は、現在、11月から3月にかけて、設楽町、東栄町、豊根村の15地区で行われています。「まいど」と呼ばれる土間の中央に釜をすえ、沸かした湯を神々に献じ、人々にも振りかけて祓い清める神事を中心に、さまざまな行事が行われます。神々や自然の力が衰弱すると考えられた霜月(11月)に、神々と人々の生命力の再生を願って行われるものでした。本展では、神事を中心に東栄町布川の花祭を、当日の進行を追って設楽町津具の花祭を紹介します。

● おたのしみ

展示室内の「人形劇団むすび座人形コーナー」では、かつて人気を博した人形劇「花祭りのてんぐ」を紹介し、主人公の「幸作」や「てんぐ」の人形を展示します。「幸作」や「てんぐ」の人形を手にとって記念撮影することもできますよ。

また、「花祭衣装コーナー」でも、花祭の衣装を羽織ったり、鉞まさかりを手にとり、記念撮影をすることができます。

● 関連事業のご案内

本展にあわせて、奥三河の文化や、田楽や花祭などへの関心や理解を深めていただけるよう、次のような関連事業を開催します。本展とあわせてご来場ください。

①山ではたらく自動車がやってくる

林業用の機械、ハーベスタが木材を玉切りします。

日時:11月3日(日) 10:15 11:45 13:15 15:15
16:45 の5回 各回10分

会場:博物館駐車場(小雨決行)

②チェーンソーアート

奥三河在住若手アーティストによる実演です。

日時:11月3日(日) 14:00 ~ 15:00

会場:博物館庭園(雨天は正面玄関底下)

③津具の花祭実演

津具の花祭をぎゅっと濃縮した実演です。

日時:11月4日(月) 13:30 ~ 15:30

会場:庭園(雨天は展示説明室)

※晴天のときは花祭当日と同じように竈かまどに火を入れます。花祭のなかの「湯ばやし」の湯にかかると健康で過ごせるといいますが、カメラをお持ちの方や湯がかかると困るという方はご注意ください。

④展示説明会(学芸員による展示説明)

日時:11月8日(金) 14:00 ~ 15:00

会場:博物館展示説明室 定員100名先着順

⑤布川の花祭実演

保存会長の解説と、実演です。

日時:11月16日(土) 14:00 ~ 15:00

会場:博物館講堂 定員220名 事前申込必要★

⑥田楽田楽の実演

夜田楽の全貌をほぼ紹介する実演です。

日時:11月23日(土) 13:30 ~ 15:30

会場:博物館講堂 定員220名 事前申込必要★

⑦奥三河物産展

五平餅など奥三河の特産品の販売。

日時:11月23日(土)・24日(日) 10:00 ~ 16:00

会場:博物館庭園

主催:奥三河やらまいか
プロジェクト

※花祭会場を飾る「ざぜ
ち」作り体験もできます。



なお、展覧会の初日には 布川のざぜち駒形
花祭の未来を考える実行委員会と共同で、次の事業を開催します。

⑧花祭を伝える ～実演・若手伝承者サミット～

東栄町月地区の花祭実演と、奥三河の花祭を支える若手伝承者のみなさんによるサミットです。

主催:名古屋市博物館

花祭の未来を考える実行委員会

日時:11月2日(土) 13:00 月の花祭実演

14:00 若手伝承者サミット

会場:博物館講堂 定員220名 事前申込必要★

★印の⑤⑥⑧の申込方法については、
名古屋市博物館ホームページ

<http://www.museum.city.nagoya.jp/>

または展覧会チラシをご覧ください。 (竹内 弘明)



ハーベスタ(写真提供:日本キャタピラー)

※11月2～4日のみハーベスタを駐車場に展示します。

字を知っている=正しく書ける？

「日本最古の文字」の性格

三重県津市大城遺跡から出土した、現時点で日本最古の「文字」資料と推定されている1850年ほど前の弥生土器片があります（津市教育委員会所蔵）。邪馬台国の卑弥呼よりさらに100年ほど前の物です。



刻書土器（津市指定有形文化財）

焼きあがっていた土器（高杯）の脚の部分に当たるこの破片の各所に、たくさんの線や傷のようなものが見られます。白っぽい部分が土器の表面です。深くえぐれて土器内部の黒い土が見えている部分を中心に「字」ととらえ、同時代の中国の書体との比較や出土の状況、高杯の祭的な性格から、現在『奉』の字であろうと推定されています（他に『寺』・『与』・『年』などを見る意見もあります）。

しかし問題があります。

写真ではわかりづらいですが、「字」を構成する横長の線2本は右の方にのびて合流し、かなり右の方まで1本の線となつてのび続けています。また後世の私たちは弥生人と違って墨で書かれた字を見慣れており、先入観から、黒い線がからみ合うとつい字をイメージしがちであることにも注意する必要があります。仮に刻んだ線全体「」に視野を広げると、これはなかなか字には見えてきません。

また『奉』などの字とする説は、いずれも実は、器としては上下が逆さまの不自然な向きでこの破片の線を見ることを前提としています。

さて、展覧会準備にあたり実際に観察したところ、1番最初と2番目に刻まれたと考えられている「」部の線が、まるで古代のハンコのように精密なV字溝の直線であることに驚きました。これは刻んでいくうちに徐々に浅くなっていく傾向がある他の線と違って、明らかにくつきり彫り込んで棒線を表現しています。

また、1番・2番目のような精密なV字溝を、通説のように器を上下逆の状態にして刻み付けることは、実際には困難だとも感じました。すると通説の上下の向きの前提も厳しくなります。

字なのか、字でないのか、あるいは上下はどちら…。謎が深まります。

これを説明する糸口を、四歳児が書いたものを感じました（下）。実はこれ、ひらがなの『す』です。



4歳児の書いた「文字」

この子の説明によると『す』という字は縦横2本の棒『+』に、『?』から点を除いた「によろり」を書き足したものの、だそうです。

正しい字を書ける人から見れば、もちろんこれは正しい『す』

ではなく、その意味ではこれは「字ではない」です。しかし、この子は正しい『す』の形は何度となく見てよく知っており、また自分では『す』の字をちゃんと書けたつもりでいます。双方のこの認識のズレに何かヒントがないでしょうか。

字には1字1字にポイントとなる要素があるので、それを落として書いてしまうと、他者はそれを字と認識できなくなります。字を知っていることと、字を正しく書けるということとは直結しません。しかし逆に、正しく書けてはいないが字は知っている、という可能性もまたあるのではないのでしょうか。

弥生時代の資料の中にも、「明らかな文字」と「字とは関係ない模様」とのはざまに、「字を知っていて、表現しようとした（がうまくいかなかった）記号状のもの」が埋もれているのではないか。この資料は私にこう語りかけている気がします。大城遺跡の土器片は、先の精密な刻線の存在などから、たまたま見た「見慣れぬ模様」を思い出して土器を引っかけたというレベルではなく、「字を知っている人が、字を表現しようとしたが、はつきり字にはならなかった」例のように思います。また、作業の難度などからみて刻線は、完形の高杯にではなく、初めから（現状のような）破片に彫りつけた可能性も考えるべきで、彫られた線の意味するものと高杯の性格とは一端切り離すべきではないか、とも考えています。

文字を創らなかつた古代日本人は、外来の漢字を習得してまず社会生活で用い、やがて文化・精神活動にも使いこなしていきました。この展覧会では、弥生時代から平安時代にかけての数多くの出土資料を中心に、その歴史をたどります。

皆さんも古代人の手さばきをじっくり観察し、どうぞ自由に思いをめぐらせてください。

（加藤和俊）

特別展

【文字のチカラー古代東海の文字世界ー】

会期：平成26年1月4日～2月16日

博物館常設展 ガイドボランティアを目指す人に

名古屋市博物館では、2階常設展のガイドボランティアとして多くの方々に活躍していただいています。それぞれがこれまで培ってこられた経験や知識を活かしながら、精力的に来館者に接しておられます。ただ、近年ご自身の体調やご家庭の事情によってリタイアされる方が重なり、毎日のローテーションが組めなくなる事態となりました。

昨年度末に、およそ5年ぶりにガイドボランティアの募集をしました。今年の2月2日(土)及び2月9日(土)に面接を行い、結果28名の方をお迎えすることになりました。一ヶ月間の研修と、もう一ヶ月の現場実習をへて、今では誰が新人かわからないほどにガイドに励んでいただいています。

名古屋市博物館のボランティアは、一義的には常設展来館者への解説サービスが任務となりますが、それだけでなく、館独自のイベントや展覧会の関連事業、学校対応事業などにもお手伝いいただいています。さらに今年度からは、ボランティア独自のワークショップを立ち上げ、来館者との交流を図っていただくことも、お願いしています。

また、名古屋市博物館ガイドボランティアは、館側から参加日を指定してお願いするのではなく、ボランティア自身による自主運営によってまかなわれています。さらには、単に常設展の解説だけにとどまらず、様々な勉強会や見学会を独自に開催し、研鑽に励んでおられます。こうした活動状況からも、名古屋市博物館ガイドボランティアは、博物館側から一方的に解説のお手伝いをお願いするといった単純なものではなく、まさに各自の生涯学習の一環として活動しておられるということに他なりません。

何れの世界でも、人に何か解説するということは、簡単なことではありません。人に話すためにはその何倍も勉強しておかないと、落ち着いて話すことは出来ません。相手は人間、何を聞き返してくるかわかりません。知っていることを全て喋ってはいは、想定外の質問には答えられません。人前で話すことは、がちんこの勝負のようなものです。その戦いに常に勝つために、日々勉強を続けられているわけです。

こう書いてしまうと、ボランティアが誰にでも簡単に出来るようなものではないと思われるかも知れませんが、実際参加しておられる皆さんは、楽しげに生き生きと会場を回っておられます。ただ、ガイドボランティアに参加するためには、少しだけ条件のようなものがあるのかも知れません。先ず第一に歴史が好きなこと、次に好奇心が旺盛であること、人と話したい、あるいは人と話せるようになりたい、そんな思いの強い人であることが大事なのでしょう。

勉強勉強と言われると、ますます勉強は嫌いになるばかり、でもそれは、好きではない教科を無理矢理やらされたからであって、好きなことなら話は別。好きな歴史で、わからないことを知ったときの喜びは格別のはず。この喜びのためになら博物館は協力は惜しみません。共に学び、共に語り、少しずつ日々高みに登り、勉強がいやなものではなく、楽しいものだと感じていただければと思っています。好きな歴史の、知らないことを学び、なるほどと感じたことを、自分なりに工夫してわかりやすく人に伝え、聞いていただいた人に喜んでもらえる、こんな楽しいことは他ではちょっと味わえないはずです。

本年度たくさん増員しましたので、しばらくはガイドボランティアの募集は計画がありませんが、何年か後にはまたお願いすることもあるかと思います。歴史が好きで、好奇心のある人は、来たるべきその日のために、日々その牙を研いでおいていただきたいと…、いやそれほどでなくても密かに情熱の炎を消さないようにしていただきたいと思っています。

(小川幹生)



ガイドボランティア活動風景

新収資料

中区古沢町遺跡出土資料 一括

縄文時代～中世 和田英雄氏寄贈

現在は多数のビルが林立する名古屋の都心・中区界隈に、縄文時代まで遡るような古い時代の遺跡が存在していることは、意外と知られていない。そして今から半世紀近くも前、市街地開発の陰で未調査のまま多くの埋蔵文化財が失われる中、先人の努力で発掘調査に結びついた遺跡のひとつが、古沢町遺跡である。

古沢町遺跡は、現在の中区伊勢山から金山一丁目にわたる一角、古沢公園と旧名古屋市民会館（現在はネーミングライツにより「日本特殊陶業市民会館」）周辺一帯に広がる。この周辺は、名古屋市中心部を南北に延びる標高約10mの熱田台地のほぼ中央部にあたり、周辺には東古渡町遺跡などがあり、縄文時代から中世に渡る各時代の遺物が出土している。

今回寄贈いただいた資料は、おもに昭和44年（1969）に寄贈者の和田英雄氏が中心となって行った、古沢町遺跡第1次発掘調査の出土資料である。この時の調査は旧市民会館の建設に伴う緊急調査であり、現在の敷地の東側と南東側で溝状遺構がそれぞれ1条ずつ検出された。遺構の埋土は貝類を多量に含んでいたという。報告書ではわずか10数日の調査期間



旧市民会館南東側の溝（2号溝）出土資料 縄文時代晩期



赤彩魚形土器片 弥生時代 左が尾びれ部、右が胸部か

と記録されているが、出土資料は縄文時代晩期から中世まで、総数700点以上に及ぶ。

資料の内訳は、土器を中心に須恵器・石器・骨角器の他、貝類などの自然遺物であり、その一部は第1次調査の報告書、ならびに『新修名古屋市史 資料編考古1』にも掲載されている。大半を占めるのは縄文時代晩期から弥生時代前期の土器群である。これらは二枚貝の貝殻によって施された条痕文をもつ粗製の甕類が主体で、一部口縁に突帯による装飾を施したものもみられる。一方、尾張平野部の弥生時代前期に特徴的な、遠賀川系と呼ばれる西日本の影響を受けた土器群はみられない。このような古沢町遺跡の出土遺物の傾向は、熱田台地上で縄文時代から弥生時代へどのように移行していったかを考える上で貴重な事例であろう。

このほか縄文時代の石斧や骨針、貝輪なども含まれる。また、弥生時代の遺物では、館蔵の当遺跡出土赤彩魚形土器片と酷似した、別個体の魚形土器片もある。類例の少ない遺物だけに、同遺跡から複数個体出土していることは興味深い。さらに、奈良時代の須恵器や瓦片も一定量みられるため、当遺跡南西300mに位置する尾張元興寺跡や、古渡付近とも推定されている古代の駅家との関係も浮かび上がってくる。

古沢町遺跡は、昭和30年代から市街地の開発工事に伴う遺構・遺物の発見のたび、文化財に理解をもつ人々によって調査が行われ、出土資料が守られてきた。現在では広範囲な発掘調査が難しい市街地の遺跡の解明には、このような先人による調査成果が重要な役割を占める。当遺跡の出土資料は、すでに吉田富夫氏、飯尾恭之氏、田中稔氏による収集資料が館蔵になっているが、和田氏による調査資料の受贈によって、公共の発掘調査以前に行われた当遺跡の調査資料をほぼ全て収蔵できたことになる。今後は、まとまった古沢町遺跡出土資料群として、より一層の活用が可能となるだろう。

（岡村弘子）